「環境に良いことを暮らしの近くに」取材先：ニチコン株式会社

2022 年 10 月 25 日、2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター7 名がニチコン株式会社の環境の取組について取材しました。今回は、呉さんと吉川さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。
（以下、寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 呉・吉川）

取材場所となったニチコン亀岡株式会社

●ニチコン株式会社様の取組

今回、私たちは、亀岡市にあるニチコン亀岡株式会社にて、ニチコン株式会社（本社：京都市中京区烏丸御池上る）の取組を取材しました。
ニチコン様は、コンデンサと蓄電システムを主力製品とされています。近年、ガソリンの価格高騰や、大雨などの災害が増加している中、「対策」を取っていくことが重要視されています。ニチコン様は、脱炭素対策とされる①太陽光発電、②蓄電池、③電気自動車に提供される製品を開発され、環境問題対策に貢献しておられます。

●V2H システム

V2H とは、「Vehicle to Home」のことで、「車から家へ」という意味です。V2H システムを利用すると、電気自動車などの車（蓄電池）に蓄えた電力を家に供給することや、逆に家から車に「倍速（追加）充電」することもできます。蓄電池は電気を溜める機器ですが、一般的な家庭用の蓄電池とは違い、V2H システムは車に家庭用の蓄電池の役割をもたせる機器です。V2H システムを通して、電気が電気自動車から家に移動するのです。最近、電気自動車の拡大により、購入を希望する人が増えているようです。V2H システムをより多くの顧客に紹介するため、日産や三菱、マツダなど、さまざまな自動車メーカと協力して電気自動車を購入する顧客に V2H システムの機器も一緒に提案されています。V2H システムを

通した電気自動車の充電は（スタンダードモデルもプレミアムモデルも）6kW です。200V・3kW 出力の普通充電器に対し、最大約 2 倍のスピードで充電できます。

V2H ポッド（左）と給電・充電の様子（右）

●トライブリッド蓄電池システム

太陽電池、電気自動車の内蔵電池、家庭内の蓄電池の 3 つの電池を統合制御する「トライブリッドパワコン」という装置を用いたトライブリッド蓄電システムは、災害や停電の際、とても役に立ちます。太陽光で発電した電気を家庭で使用、蓄電するだけでなく、電気自動車を走らせることも可能です。電力を家でつくって家で使う、電力の「家産家消」を目指しています。

自然災害が起こり停電になった場合、太陽電池で発電され、電気自動車や家の中の蓄電池に溜まっていた電気が数秒ですぐ家に供給され電気を使うことができます。

トライブリッドパワコン（左）と V2H スタンド（右）

●パワー・ムーバー

電気自動車などの車の電気を取り出して使え、持ち運ぶことのできる製品です。ハンドルやキャスターがついているため持ち運びに便利で、重さも軽量化が進められ、現在 21 kgとなっています（パワー・ムーバー・ライト）。車のトランクに収まるサイズなので、2019 年の台風 15 号時にもパワー・ムーバーにより被災地へと給電が行われました。電気を有効活用できるだけでなく、災害時にも対応可能なシステムであることを実感しました。

パワー・ムーバー（左）とパワー・ムーバー・ライト（右）

●ニチコン明るい未来館

ニチコン明るい未来館とは、ニチコン亀岡工場の敷地内にあるモデルハウスです。ここでは、屋外にある V2H や、トライブリッドパワコン・V2H スタンドを見学させていただきました。さらに屋内では、模擬的に停電を発生させることで、停電の際にトライブリッド蓄電システムにより給電するデモンストレーションを見せていただきました。停電が起こっても、1～2 秒で蓄電システムなどから送られた電気によって部屋が明るくなることを目の当たりにしました。ニチコン様のシステムによって、環境に配慮しながら快適な生活を目指せることが分かりました。

ニチコン明るい未来館を見学する様子

ニチコン明るい未来館

●私たちに求められていること

「環境問題に対応するために、私たちができることは何ですか」とお聞きしたところ、ニチコン株式会社広報・IR 室副室長　武田様より「環境問題の重要性に気付くことが大切。気付くことができれば、次のアクションへとつながる」というご回答をいただきました。環境問題にいち早く注目し、よりサスティナブルな社会へと繋げられる製品を生み出しておられるニチコン様だからこそのお言葉だと感じました。同時に、より多くの方々が環境に配慮した製品を知ることで、環境問題に気付いてもらえれば、という気持ちを強くしました。

●取材を終えて

今回、ニチコン株式会社様の取材を通して改めて環境問題に取り組むことの重要性について考えるようになりました。環境問題に取り組むにあたって、「私 1 人で変わることはない」と考えるかもしれません。しかし、環境問題は我々が解決しなければない共通の課題です。環境問題の深刻性に気づき、解決に向けて取り組む必要があると思います。

取材日：2022 年 10 月 25 日

寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター　呉・吉川

「エコに涼をとろう-グリーンカーテン-」（取材先：福知山市立南陵中学校３年生の生徒・先生、エスペック株式会社の土田様、たんたんエナジー株式会社の木原様）

2022 年 7 月 1 日、2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター10 名が福知山市立南陵中学校に伺い、福知山環境会議とともに実施された、同校の SDGs 教育プログラムについて取材しました。取材先は、同校 3 年生の生徒の皆さん、平野先生、またご講演をされたエスペック株式会社の土田様、たんたんエナジー株式会社の木原様です。

今回は、2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの大島さんと平田さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

（以下、寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター　大島・平田）

●グリーンカーテンの取り組み紹介

7 月 1 日、京都府福知山市の南陵中学校にて環境学習として、土田様と木原様による気候変動対策の講義とグリーンカーテンの植え付けが実施されました。

ユースサポーターは、参加した生徒の皆さん、先生方、土田様や木原様にインタビューを行い、グリーンカーテンの植え付けも体験させていただきました。

今回植えた植物はゴーヤで、成長するとつるを伸ばしグリーンカーテンとなります。日射をやわらげ、蒸散作用で湿度を下げるグリーンカーテンは、電源や燃料を必要としない、環境にやさしい空調装置と言えます。家庭でも簡単に導入することができるため、環境に配慮した生活を送りたいという方にはおすすめの取組です。

講演をされる土田様

講演をされる木原様

生徒の皆さんがグリーンカーテンの植え付けをする様子

●生徒の皆さんへの取材

ユースサポーター：小学４年生のときにも体験したと聞きましたが、そのときとの違いは？
生徒：当時は地球温暖化について何も知らないまま取り組んでいましたが、今回は理解して取り組むことができました。その意識の中で気候変動対策に取り組むことは大切だと思いました。また、家庭でも簡単にできるのでやってみたいと思いました。
ユースサポーター：植え付けをしてみて地球温暖化に対する意識は変わりましたか？
生徒：これまで温暖化は自分たちが何をしても変わらないと思っていましたが、グリーンカーテンのような気軽で楽しい取り組みならできそうです。もっと広まってほしいです。
ユースサポーター：植え付けをしてみてどのような感想を持ちましたか？
生徒：燃料の使い方など、生活を改めていきたいと思いました。また、2050 年までに温室効果ガス排出ゼロにすることを考えながら生活してみたいです。

生徒の皆さんに取材する様子

●先生への取材

グリーンカーテン授業の感想についてお聞きしました。

ユースサポーター：この活動から生徒に学んでほしいことは何ですか？

平野先生：これまで、授業の中で SDGs のことや地球温暖化について学んできました。今回、気候変動の現状を知ることができたので、自分たちに何ができるのか考えてほしいです。

ユースサポーター：この活動を通じて感じたことは何でしょう？

平野先生：暑いな、としか思っていませんでしたが、こんなにも地球温暖化が進んでいることを実感しました。1 人の先生、1 人の人間として何ができるのかを考えていきたいです。

先生は、いかに地球温暖化が進んでいるのか、また地球環境のために何ができるのか、それを行動に移すことの重要性を理解したとおっしゃっていました。

3 年生学級の担任を持つ平野先生に取材する様子

●エスペック株式会社　土田さんへの質問

ユースサポーター：土田さんは、出前講座や講習会など、グリーンカーテン普及のために様々な活動をしてこられましたが、活動のきっかけは何ですか？

土田さん：京都府が活動を推進していたため、有志でやってみようと思いました。忙しいときは、午前と午後で 1 日 2 件回って活動しています。

ユースサポーター：コロナ禍での活動はどのようになっていますか？

土田さん：YouTube を使用して活動を行いましたが、高齢者で視聴が難しい方などがいらっしゃるので、やはり対面で活動する方が良いと思いました。

ユースサポーター：今後活動してみたい地域はありますか？

土田さん：今はコロナ禍で全国を回ることができないため、コロナ禍が明けたら全国を回りたいです。

ユースサポーター：今後生徒に期待することは何ですか？

土田さん：お世話しようとする気持ちを持ちながら、愛情を持って育ててほしいです。

土田さんは個人的にグリーンカーテンの取組をされていたところから始まり、エスペック株式会社でも取り入れられ、どんどん地域の方や全国へとその取組が波及するようになり

ました。ユースサポーター向けに事前学習会を開いてくださったときにも、「グリーンカーテンは楽しく愛情をもって育てないと続かない」と語っておられたのが印象に残っています。

土田さんに取材する様子

●たんたんエナジー株式会社　木原さんへの取材

まず、地球温暖化の原因となる温室効果ガスの排出削減、脱炭素化の実現で注目される再生可能エネルギーについて質問しました。

ユースサポーター：再生可能エネルギーの中で、導入ポテンシャルの高いものは何でしょうか？

木原さん：最もポテンシャルが高い再生可能エネルギーは、風力発電です。日本では設置が遅れていることもあり、普及を進めたいと考えていますが、地域との合意形成が課題になってくると思います。

ユースサポーター：ではその再生可能エネルギーを拡大する秘訣は何ですか？

木原さん：今は企業が CO2 削減などの対策をしないと取引をしてもらえない社会に変わってきています。企業の意識が高くなっているので、そこに呼びかけていくことだと思います。

温暖化対策には私たちの行動が不可欠です。どのようにその行動を広げていくかをお聞きしました。

ユースサポーター：どうすれば温暖化防止活動は広がりますか？

木原さん：これまでは 1 人 1 人の積み重ね、我慢が大事だと思い、幅広く活動してきました。でも、我慢を周りの人に強いても活動は拡大しないと感じています。これからは、社会にあふれている自然の恵みを有効に使っていこうというプラスの面をアピールしていくことが重要ではないでしょうか。

ユースサポーター：地球温暖化の深刻化で温暖化防止活動を始めた人もいますが、まだ行動に移せていない人たちを巻き込むにはどうすればいいでしょうか？

木原さん：まずは関心を持ってもらうことが大切です。気候変動の深刻さだけを伝えるのではなく、今とは違う社会になった方がいいのではないか、という視点で伝えるのが重要です。実際に、エネルギー燃料を輸入して海外にお金を出すよりも、環境に良い社会のために日本

に投資する方が望ましいと言えます。また、意識の変化と同時に制度を変えていくことも必要です。脱石油、脱石炭を支援する人の輪を広げていくこともその一つでしょう。

木原さんは、再生可能エネルギーの需要と供給を繋げる仕事をされており、脱炭素化のためにも私たち一人一人の意識や行動が重要になってくると強調されました。

木原さんに取材する様子

●取材を終えて

今回の取材から、地球温暖化対策として私たちが簡単に始められる行動もあり、グリーンカーテンのように身近なところから取り組んでいくことがいかに重要なのかを強く実感しました。地球温暖化対策は、大変なことばかりではなく自然の恵みを感じたり楽しい面もあるということを多くの人に知ってもらうことで、環境に対する意識や行動の変化につながるのだということを学びました。脱炭素化や、今までの制度や常識を変えるためにも今回のような取り組みを広げていくことは大きな意義があると思います。

グリーンカーテンの苗が渡り廊下沿いに並べられている様子

取材日：2022 年 7 月 1 日

寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター　大島・平田

「KYOTO 地球環境の殿堂」サイドイベント ～京都スマートシティエキスポ 2022～

2022 年 10 月 6 日、けいはんなオープンイノベーションセンターで開催された「京都スマートシティエキスポ 2022」にて、イケア、H&M ジャパン、2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの 3 者で、「衣食住の観点から考える脱炭素に向けて」をテーマにトークセッションを行いました。（セッションの様子はこちらよりご覧いただけます。）

今回は、セッションの様子を見学していた笠井さんと中島さんと横江さんに、両社の環境の取組についての記事を書いていただきました。

（以下、寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター　笠井・中島・横江）

2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターと企業（H&M、イケア）のセッションの様子

●「より健康的で持続可能な暮らしを多くの人に」

取材先：イケア・ジャパン株式会社（以下、イケア）

地球温暖化への関心が高まり、その中で企業が CO2 の削減をすることは環境への配慮はもちろん、ユーザー意識や世界情勢、投資家が投資するかどうかの判断基準にも繋がるため、近年では多くの企業が持続可能な経営を心がけています。

イケアもその 1 つですが、実は最近始めたということではなく、「優れたデザイン」「機能性」「品質」「サスティナビリティ」「低価格」の 5 つの要素をすべて満たすようにデザインされた商品などを含めた環境と社会への配慮は、創業当初から共通の価値観として意識されているとのことです。

健康的で持続可能な暮らしを実現するため、気候変動への対策のため、今回は同社の取り組みの中でも「食」と「住」にフォーカスして紹介いたします。

イケアの野山様（左）と鶴田様（右）の講演の様子

●地球も身体も舌も満足！三方良しなプラントベースフードとは？

イケアの魅力の 1 つが手頃で美味しいフードメニュー。そのフードメニューにもサステナブルな取り組みが行われています。それがプラントベースフード。原材料に肉や卵を一切使わずに植物由来の原料だけ使用したメニューになっており、地球にも健康にも優しいというメリットをもたらしてくれます。イケアでは年々商品数を増やしているところだということです。

日ごろお肉をよく食べる人は少なくないかもしれませんが、実はお肉は食品の中でも特にカーボンフットプリントが大きいと言われているのを知っていますか？例えばイケアには年間 10 億個以上の売上がある「ミートボール」があります。通常ひき肉を使うことが多いミートボールですが、植物由来の材料を使う「プラントボール」に置き換えることで、通常のお肉を使ったものよりも、製造過程などから排出される温室効果ガスを 96%も削減できるとおっしゃっていました。年間 10 億個のミートボールが置き換わっていくと、かなり大きな影響があります。地球にも身体にもやさしいプラントベースフード、一度食べてみてはいかがでしょうか。

プラントボール（画像出典：IKEA HP）

●使い続けたい家具

イケアといえば家具。もちろんその家具にもサステナブルなこだわりが詰まっています。まず生産の段階ではリサイクル可能な材料を使用し、より長く使えるような工夫をしているそうです。そうすることで、地球への負担軽減及び共生への道、そしてお客様のお金や時間の節約をすることができます。

また、パーツごともそれぞれ分解しやすいように作られており、そうすることで、たとえ購入後に要らなくなったり壊れてしまったりした場合でも家具の引き取りや下取り、修理などにも対応してくれるサービスがあります。引き取られた家具は、メンテナンスを施したうえで、イケアの Circular Market（サーキュラーマーケット）で販売されるとのことです。とても簡単にリユース・リサイクル・リデュース（廃棄物の削減）することができます。

生産から使用後までサステナブルにこだわっており、それでありながらもデザイン性と手軽さも兼ね備えた商品となっています。今後は接着剤にもこだわり、バイオ接着剤を取り入れていきたいと語ってくださいました。根本から変える必要がありますが、既に導入に向けて動き出しており、導入の実現は現実的とのことです。是非お楽しみに。

●「サステナブル製品で楽しいファッションへ！」取材先：エイチ・アンド・エム　ヘネス・アンド・マウリッツ・ジャパン株式会社（以下、H&M）

H＆M の山浦様の講演の様子

●サステナビリティに対する姿勢

H&M は、ファッションブランドであり、より多くの人によりサステナブルな製品を届けるために、ファッションとクオリティを最良の価格でサステナブルに提供することを心掛けています。製品だけでなくサステナビリティとファッションの両立を目指し、よりサステナブルな素材と生産工程で、ファッションも楽しめるようにということを目標にされています。また、「グリーンタグ」を 50%以上リサイクルまたはサステナブルに調達された素材を使用した商品に貼付されており、区別がつけられています。

●気候変動問題への取り組み

脱炭素社会実現のため、2025 年までにリサイクル素材の使用を全体の 30%にまで引き上げることを目標とし、2030 年までにリサイクルまたはサステナブルに調達された素材のみを

使用すること目標とされています。2021 年現在、リサイクル素材の使用率は 17.9%であり、リサイクルまたはサステナブルに調達された素材のみを使用するという目標に関しては、現時点で 80%達成されています。そして、2040 年までにネットゼロ（温室効果ガスの排出を実質ゼロにする）を達成することを目指されています。

●持続可能なビジネスの実現へ

サステナビリティは、すぐに達成できるようなものではなく、10 年、20 年、30 年と長期的な目標です。目に見える形に現れるのには時間がかかるため、先が思いやられてしまいますが、取り組まないことのほうがコストが高く、お客様のことを第一に考えて、サステナビリティの取り組みをするべきと考えられています。

●食用ごみなどを再利用して衣服へ！

H&M のよりサステナブルな製品の中には、オレンジジュースを作るときのオレンジの皮やワイン製造の際に発生するブドウの皮・種・茎を原料にした植物由来のレザー素材など、普段捨てるようなものを再生利用して使えるようにされたものもたくさんあります。こうした意外なものを素材に採用するという取組があれば、環境に対する取組を楽しく広めることができると感じました。

革新的な素材から作られる製品の例

●ファッション業界のこれからのために・・・

循環型ファッション業界を目指し、イノベイティブなアイデアや取組を支援する活動として、「GLOBAL CHANGE AWARD」があります。こちらは、H&M グループの創業者一族が設立した非営利財団「H&M ファウンデーション」が毎年主催する国際的なイノベーション・コンペティションで、例年、スタートアップやベンチャー企業、学生の方の参加が多いそうです。参加者のアイデア・技術が産業レベルにまで拡大するようなフォローアップをされており、2019 年には日本のチームが受賞し、アイデアが実用化につながった例もあるとのことで、ぜひ日本の皆様にもご参加いただきたいと山浦様は語っておられました。

●取材を終えて

目の前の利益だけではなく、長期的且つ多角的な目で見られているなという印象を受けました。商品として展開している家具や食品はもちろん、エネルギー部門や配送部門にまでサステナブルな視点を向けておられ、それに対して着実に成果を見せていることに感服しました。また、何よりもそういった環境対策に対してイケア様が単独で頑張っているということではなく、トークセッションで登壇されていたH&Mジャパン様も同様に先を見据えた経営をされているというお話をしていただいて、二社含めた環境への取り組みを図る企業様が、今後どんな活躍を見せていただけるのかと期待に胸を膨らませることができました。私たち消費者も購入から消費までの段階でできることはたくさんあると思います。情報を集め、行動に移し、企業と共に環境に優しい社会を目指していきましょう。（笠井）

取材を通して、H&M様の環境に配慮した取り組みに対する前向きな姿勢は、「お客様にファッションに楽しんでもらい、よりサステナブルな製品に興味を持ってもらいたい！」という目標からきていることが印象に残りました。また、「グリーンタグ」をよりサステナブルな製品につけ、よりサステナブルな製品をお客様にわかりやすく伝え、知ってもらうということが前提として必要になると思いました。（横江）

イケア様もH&M様も、世界へ大きな影響力をもつ企業としての責任を強く意識されており、それぞれの強みを活かして環境保護への取り組みを行なっているとの事でした。みなさまはそれらを、明確な目標設定をすること、共通の価値観を会社全体に浸透させること、良い変化をもたらすだけでなくそれを少しずつでも当たり前の状態にしてゆくことをしっかり心がけることで成し遂げられているのだと感じました。イケア様は食住の観点から、H&M様はファッションを長く楽しむという観点からサステナビリティを模索されており、そういった生産者の思いや努力を消費者である私たちが受け取り一緒に取り組んでいくことが重要であると実感できた、とても実りのある取材でした！（中島）

イケアの野山様、鶴田様、H&Mの山浦様と、2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター（登壇した3名、見学した3名）

実施日：2022-10-06

寄稿者：2022年度WE DO KYOTO!ユースサポーター　笠井・中島・横江

「“Wood you like a Sustainable Life?“ 木材を通して持続可能な社会へ」取材先：林ベニヤ産業株式会社

2022 年 10 月 7 日、2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターが林ベニヤ産業株式会社に伺い、同社の環境の取組について取材してきました。今回は、下道さんと渡邉さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

（以下、寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター　下道・渡邉）

●林ベニヤ産業とは

林ベニヤ産業様は針葉樹(スギ、カラ松、ヒノキなど)の原木を材料に合板を製造及び販売している企業です。かつての合板の材料である南洋材(ラワンなど)は、森林が再生できないといった問題点がありました。その問題を改善するべく 1982 年に“国内で初めて”再生可能な針葉樹合板の量産体制を完成させ、かなり早い段階から環境に配慮した取り組みをおこなっている企業でもあります。

林ベニヤ産業様の顕彰碑

●環境に配慮された合板製造

林ベニヤ産業様では、合板の製造時に発生する原木の樹皮や単板の端切れ、切り落とした四辺などの端材を粉砕し木質チップとして作り替え、切断時に出る木粉も機械で固め、バイオマス発電の燃料として利用しており、木材を余すことなく活用されています。他にも合板の材料となる原木は約 8 割が国産のものを使用しており、海外産に比べ原木輸送の際に生じてしまう CO2 の排出量を削減しています。今後は CO2 をより削減するために、国産(特に京都府・京都市産のもの)を活用し国産使用率 100%を目指しています。

合板の材料になる原木(左)と国産原木を活用した合板(右)

●木材を活用したバイオマス発電

林ベニヤ産業様では、合板の製造以外にも木材を燃料にしたバイオマス発電をおこなっています。燃料のうち約８～９割は工場の端材で、残りの１～２割は未利用材など林地残材を活用したものとなっています。バイオマス発電所の規模は 6800kw で約 15000 世帯分の電力をまかなうことができます。また、化石燃料を使用せず木材を燃料に使用することでカーボンニュートラルも達成しています。

合板製造の際に出た端材を加工して作った木質チップ(バイオマス発電所の燃料に)

●重要なことは“私たちの身の回りを木製品で囲むこと”

地球温暖化を改善するうえで「私たちの身の回りを木製品で囲むこと」そして「木を切る＝悪であるというイメージを払拭すること」が大事であると仰っていました。森林が荒れないようにし続けるには植林→成長(CO2 を吸収)→伐採・加工という循環を守ることが必要不可欠になります。この循環を維持するためにも自分たち消費者が木製品を利用すること、身の回りを木製品で囲むことの重要性を積極的に発信し、多くの人に認知してもらう必要があると感じました。

取材中の様子(取組や今後の展望・想いなど熱く語っておられました)

●取材を終えて

林ベニヤ産業様は早い段階から持続可能性や再エネに目を向け、再生可能な針葉樹合板へのシフトチェンジや木材を燃料としたバイオマス発電など様々な対策を講じられていることを知ることができました。特に木材を余すことなく活用されているのを見て、木材を通して環境保全・持続可能な社会を作るという徹底した姿勢、強い意志を感じることができたように思います。また、自分たち消費者も木製品を取り入れることで森林の循環を手助けすることができるので、皆さんもぜひ一度木製品に目を向けてみてはいかかでしょうか。

“Wood you like a Sustainable life?”(木を通して持続可能な生活はいかがですか？)(※ユースサポーターの造語です。

取材では、中岡様(前列左から 1 人目)、藤原様(前列 2 人目)、池上様(後列左から 1 人目)にご対応いただきました

取材日：2022 年 10 月 7 日

寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター　下道・渡邉

「科学技術で持続可能な社会の実現へ」取材先：株式会社島津製作所

2022 年 9 月 15 日、2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 8 名が株式会社島津製作所に伺い、同社の環境の取組について取材してきました。今回は、木村さんと吉田さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。
（以下、寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 木村・吉田）

●環境に配慮した事業実施

島津製作所様は分析・計測機器の製造を中心に医用機器、産業機器、航空機器等も製造されている企業です。「科学技術で社会に貢献する」という社是のもと、最先端技術の開発で社会の発展を支えていらっしゃいます。この技術を駆使し、環境に配慮した製品づくりや事業を行われていました。

●気候変動問題への取組

脱炭素社会実現のため、2050 年までに事業活動に伴う CO_2 排出量を実質ゼロにするという目標を掲げられています。積極的な再生可能エネルギーの導入や省エネの推進を行われた結果、以前は年間約 5 万トンだった CO_2 排出量を、2021 年度には約 1 万 8 千トンに減らすことに成功されています。

●環境性能の高い製品の開発

多岐に亘る分野で様々な製品をつくられている島津製作所様ですが、その全ての製品をエコ化されています。中でも特に環境性能の優れた製品を「エコプロダクツ Plus」と認定し、消費電力削減 25%以上、小型化 25%以上、消耗品使用量削減 25%以上等、従来機種と比較し、いずれかの要件を満たす製品を認定しているそうです。性能を改善しながら環境の側面でも向上させる必要があり、この両立に苦心しながらも取り組まれているとのことでした。

島津製作所様から取組概要を説明いただく様子

●IoT を活用したごみの回収システム

工場で発生する廃プラスチック量を自動的に計測し、効率的な運搬を実現するシステムを導入されています。廃プラスチックの集積所の天井にセンサーをつけ、協力工場を含めた国内 5 ヶ所の事業所の廃棄量をリアルタイムで把握することで、その時々に応じた効率的な回収ルートを選択することができます。このシステムの導入により、企業全体で廃プラスチック運搬時の CO_2 排出量を 2 割削減することに繋がったそうです。

集積所のセンサー

●生物多様性保全活動

島津製作所様の本社・三条工場内には、「島津の森」が整備されています。敷地面積が約 8,000 ㎡のこの島津の森では、フタバアオイやヒオウギといった京都の伝統文化を支える植物の保全や、フジバカマやキクタニギクなどの京都にゆかりのある希少植物の保全・育成が行われており、そのうちフタバアオイ及びフジバカマの保全活動は、京都市のプロジェクトである、「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」に認定されています。この他にも 90 種もの地域在来種を中心とした植物が植栽されています。

「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」認定の証

2015 年には、生物多様性の保全・回復への取組を客観的に評価・認証する制度である、公益財団法人日本生態系協会によるハビタット評価認証において、西日本の製造企業で初となる最高ランク AAA 評価を取得されました。現在も AAA ランクを維持されています。

島津の森を視察する様子

植物についてのＱＲコードの展示（日本語のほか、英語、中国語版も）

●取材を終えて

取材を通して、島津製作所様の環境に配慮した取組に対する前向きな姿勢は、社員の方一人ひとりの積極的かつ自主的な取組がベースとなっている印象を強く受けました。部署の垣根を超えたボトムアップな活動の例として、1999 年に発足した環境活動チーム「え～こクラブ」の活躍があるとのこと。職場はもちろん子ども達に向けた環境学習支援や環境に関する出前講座を行うなど、次の世代に対する環境教育に貢献されています。

京都という土地で、いち早く環境問題についてアクションを起こしてきた島津製作所様。これからも自治体、地元住民の人々と地場の企業とが一体となって環境問題に取り組んでいきたいということでした。島津製作所様のホームページでは、問い合わせのフォームが設けられています。島津製作所様の環境問題に対する姿勢に興味を持った方、ご質問やご要望などを寄せてみてはいかがでしょうか。

取材では環境経営統括室の三ツ松様（前列左から３人目)、阪ノ下様（前列左から４人目)、小森様にご対応いただきました。

取材日：2022 年 9 月 15 日

寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター　木村・吉田

「企業、消費者、地域で環境を守る」取材先：株式会社川島織物セルコン

2022 年 8 月 29 日、2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 8 名が株式会社川島織物セルコンに伺い、同社の環境の取組について取材してきました。今回は、中島さんと福田さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。
（以下、寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 中島・福田）

●SDGs への取組と影響

近年、環境に優しい製品の需要は高まっており、また SDGs への取り組みが重視されるようになってきています。こうした中、環境に配慮したモノづくりや SDGs に積極的に取り組むことは、企業として大きなメリットがあると川島織物セルコン様は考えておられます。SDGs などを大切にした活動を行うことで企業の信頼度が上がり、より事業や社会に貢献できることがあるそうで、リサイクルできるなど、環境への配慮を条件に仕事を受けることも。SDG s や環境に優しい取組をしていることがアピールポイントになるようです。

同社が重点目標として掲げる環境への取組に関連する SDGs 目標

●持続可能な社会への積み重ね

川島織物セルコン様では、SDGs などの取り組みの方針は、公式なデータやニーズに基づいて決定されますが、その方針は社員・顧客といったすべてのステークホルダーに共有されることになっています。一部だけでなく、全体で同じ意識を持てるようにされているそうです。特に社内では、社員の皆さん一人ひとりが自分の目標を書いたカードを作成されているとのこと。ある社員の方はペーパーレスを目標にするなど、自分で取り組めるものを掲げられていました。SDGs などの取組を始めてから、社員の皆さんの意識や行動にも変化が現れてきたそうです。重点目標で定めた目標の実現に向け、自社でできる小さな積み重ねをしていくという姿勢を大切にされています。

●CO_2 ゼロは「可能」

「2050 年までに CO_2 排出量実質ゼロは可能だと思うか」という私たちの質問には「可能です」とはっきりと答えてくださいました。排出を最小限にし、カーボンニュートラルの実現に向けて再エネ電気の購入などにより排出される CO_2 をゼロにしようという方針だそうです。また、川島織物セルコン様では製造のすべての工程が社内で完結するため、無駄な輸送

を減らすことができているのも強みといえます。「今の時代、2～3 年前には考えられなかったようなことが可能になってきています。今できないと思っていることも、数年後にはきっと可能になるでしょう。」と希望を語ってくださいました。

社員の方はユースサポーターの間に座り、インタビューに応じてくださいました

●大切なのは「活動をオープンにして信頼関係を築くこと」

川島織物セルコン様では、施設の一部を地域へ開放したり、織物と環境との関連をテーマにした出前授業を小学生に向けて行ったりと、地域との関わりを大切にされています。企業活動には、地域の人々の理解も必要です。地域との交流会や排水を浄化する施設の公開など、どのような活動をしているかを地域住民に積極的に伝えることも行われています。地域との密接なコミュニケーションによって、「誤解のないように」理解を得て信頼関係を築くことができると言われています。

●「ニーズを教えて」―　私たちにできること

「川島織物セルコン様をはじめ、企業にとって消費者・地域住民である私たちにできることはあるか」と尋ねてみたところ、「環境に優しい製品を買ってほしい」「ニーズを教えてほしい」との返答が。環境に配慮された製品には、それを示すマーク（グリーンエネルギーマーク、エコマーク、エコニールマーク）が付けられています。デジタルカタログなどで確認することができるため、製品を買う際に意識してみてはどうでしょうか。また、企業活動は消費者のニーズに基づいて行われます。私たちだけでは実現が難しくても、企業と協力すれば実現できるかもしれません。「企業だけではアイデアに限界が出てきます。外側からの提案が欲しいのです。」―企業と消費者・地域住民が一体となって取り組むことができます。ホームページの「お問い合わせフォーム」から、私たちの声を届けてみませんか。

●取材を終えて

私たちの質問に対して、はっきりと、丁寧に答えてくださいました。特に、ゼロカーボンが可能であると即答されたことは印象的で自信を感じました。環境活動に対する姿勢が積極的で、地球サミットの翌年には環境保護委員会を設置するなど、先見の明がある企業なので、きっと実現するだろうという希望を持つことができました。また、地域との密な関わりによ

って、身近なニーズを吸収することがポイントだと学びました。地域の方々にとっても、信頼できる、応援したくなる企業なのだと思います。
私たちは企業に対して、製品を購入する、意見を送るといった方法で意思表示をすることができます。企業と協力して環境を守る取組ができれば、もっと環境に優しい社会の実現に近づくのではないでしょうか。

左から順に、川島織物セルコン人事総務部 CSR・安全衛生推進グループの小阪様、蒲田様、小畑様にご対応いただきました

取材日：2022-08-29

寄稿者：2022 年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター　中島・福田